
【茨城県教育研修センターメールマガジン】「きたやま通信」Vol.6 [2023.9.15]

※メルマガ「きたやま通信」の配信を個人で希望される方は、こちらのQRコード(もしくはURL)から、教育情報ネットワークのアドレスでの登録をお願いします。



<https://forms.gle/UGNXEb9q5ysYwGBG8>

本メルマガを多くのお知り合いの方々にもご紹介いただけますと幸いです。

【ラインナップ】

- 1 研修室点描
- ◆1 教育相談(初級)研修講座
- ◆2 未来を創るSTEAM教育研修講座第1日
- ◆3 通常の学級における特別支援教育研修講座
- ◆4 小学校段階におけるプログラミング教育研修講座
- 2 センター事業のご案内
- ▼NITS・茨城県教育研修センターコラボ研修
- ▼Online EdCafé 第28回の公開
- 3 参考資料等のご紹介
- ▼すけっとばすけっと
- 4 推挽録

■1 研修室点描

◆1 教育相談(初級)研修講座

○期日 【A班】8月1日(火)、【B班】8月8日(火)

○人数 各班 56人

○内容 〈講義・演習〉・「教育相談の基礎」筑波大学 杉江 征 教授
・「個別面接の基礎I」教育相談課職員

○受講者の声

・見よう見まねで相談や面接をしてきたが、本日の研修で、自分がしゃべり過ぎていること、アドバイスをし過ぎていることに気づけた。自分の気持ちではなく、話し手の気持ちに寄り添いたいと思う。

・たった1つの言葉でも、自他で全く同じことはないということを演習で学んだ。「あれっ?」という感覚を大切に、自分には分からない話し手の世界を共有していきたい。

○教育相談課より

・杉江先生からは、特別な会話の仕方に必要なものをわかりやすくご教授いただき、受講者の多くが熱心に聞き入っていました。カウンセリングにおける聴き方・話し方は日常会話のそれとは違うということに、皆さん気付いてく

れたようです。

◆2 未来を創るSTEAM教育研修講座第1日



○期日 8月7日(月)

○人数 小・中・高・特 77人

○内容

〈講義・研究協議〉

「新しい学びを創造するSTEAM教育」茨城大学 小林 祐紀 准教授

〈実践発表・研究協議〉「STEAM教育の実際」

・つくばみらい市立豊小学校 宮内 一樹 教諭

・鹿嶋市立鹿野中学校 野口 彩歌 教諭

・下妻第二高等学校 北條 奈緒美 教諭

〈講義・研究協議〉「STEAM教育に広がる教科等横断的な学び」教科教育課職員

○受講者の声

・実践発表を聞いて、これまで考えていたよりも垣根が低くなり、挑戦したいと思うワクワク感が芽生えた。

・STEAM教育の進め方が分かり、前向きに取り組もうという気持ちになった。子どもたちと共にまずはやってみる精神で、挑戦していきたいと思う。

・STEAM教育の実践や進め方について他の先生方にも共有していきたい。同時に子どものワクワクを大事に、時間のある夏の間にかリキュラム・マネジメントを行い、実践してみたいと思った。

○教科教育課より

・各校種の実践発表から、受講者はSTEAM教育の具体的なイメージをつかむことができた様子が見られました。

・講義「新しい学びを創造するSTEAM教育」により、STEAM教育の効果や多様性を知り、校内での実践につなげたいという感想がたくさん寄せられました。

・第2日は、1月23日に実施します。STEAM教育の授業づくりについて、演習を通して体験的に学んでいきます。

◆3 通常の学級における特別支援教育研修講座



○期日 8月9日(水)

○人数 小・中80人

○内容

〈講義・演習〉「特別支援教育の視点を踏まえた児童生徒への対応」 明星大学 森下由規子 教授
インクルーシブ教育システムに基づいた授業づくりを中心に

〈実践発表・研究協議〉「特別支援教育の視点を踏まえた学級経営の実際」

- ・結城市立結城西小学校 遠井 正修 教諭
- ・神栖市立神栖第二中学校 梅田 邦彦 教諭

〈講義・演習〉「特別な教育的支援を必要とする児童生徒への対応」 特別支援教育課職員

○受講者の声

・情緒面で課題のある子どもに対し、どのような声掛け、支援をしていくか考え、モデルになるものを得ることができたと思う。生徒に寄り添うこと、丁寧に話を聞き取っていくことを大切にしながら、生徒たちの自己理解や適応を促せていけたらと思う。

・一人一人違う子どもなりの学びを提供する環境作りを学校全体で考え、子どものためにどうしたら良いか、良い方法を模索したいと思った。

・学校に戻ったら、児童のアセスメントをしっかりと行い、子どもの成長を支えていきたい。

○特別支援教育課より

・講師の森下先生からは、誰もが学びを深めるために、通常の学級担任として何を大切にするかについて考える時間となりました。

・実践発表の後の研究協議では、受講者各自の日頃の実践を振り返って工夫している点を意欲的に話す姿が各グループとも見受けられました。

◆4 小学校段階におけるプログラミング教育研修講座



○期日 8月8日(火) 9日(水)

○人数 52名(小46、中3、中等1、高2)

○内容

〈講義・演習〉「教育の情報化と小学校段階におけるプログラミング教育」 情報教育課職員

〈実践発表〉「小学校段階におけるプログラミング教育の実際」

- ・行方市立北浦小学校 織田沙耶子 教諭
- ・日立市立成沢小学校 生田目道晴 教諭

〈実習・演習〉「小学校段階におけるプログラミング教育の実際」

織田教諭、生田目教諭、情報教育課職員

〈演習・研究協議〉「プログラミング教育の授業づくり」 同上

○受講者の声

・アンプラグドプログラミングの手法(端末を使用しないプログラミング学習)が特別支援学校の日常生活の学習において有効であり、無意識にその手法をとっていたものもあることに気付いた。今日紹介のあったプログラム以外にも色々試し、子供たちにあった、ねらいに迫れる活用の仕方を見つけていきたいと思う。

・これまでは、ICT活用スキルばかりに気をとられ、プログラミング教育まで力を入れて取り組むことができなかった。今日の研修を通して、必ず取り組む内容や授業内でプログラミングになるなと思うところは今後意識して実践していきたいと思った。

・これまで低学年でのプログラミング教育はとても難しいと思い込んでいた。しかし今日の講義や実践発表の中で取り上げられていたアンプラグドプログラミングは自分でも取り組むことができそうだと感じた。

・ICTを用いさえすればよいというわけではなく、プログラミング的思考を育むことこそが大切だということが分かり、様々な教科でプログラミング教育を取り入れいきたいと思った。

○情報教育課より

・第1日はプログラミングの基本的な操作から研修したい方、第2日はより発展的な研修をしたい方向けの講座としました。

・振り返りのアンケートには、様々な気づきや、新たな知見を吸収できたことについて記載した方が多くいらっしゃいました。各自のスキルや現状に応じて、学びを深める機会となったようです。

■2 センター事業のご案内

▼NITS・茨城県教育研修センターコラボ研修(教職教育課)

「スクールリーダーを育てるハイブリッド型 Online Learning～学校の未来を拓く新しい学びとマネジメントについて考える～」第4回の聴講者を募集しています。

〈講座〉「新しい学びの推進」

〈講師〉学校法人桐蔭学園理事長 桐蔭横浜大学 溝上 慎一 教授

募集締め切りは、令和5年9月27日(水)となっております。次のQRコードまたはURLよりアクセスし、お申込ください。



<https://forms.gle/hpPnfHak4azf7CDa6>

※詳細は[こちら](#)よりご確認ください。

<https://www.center.ibk.ed.jp/wysiwyg/file/download/1/3241>

▼Online EdCafé(オンラインエドカフェ)第28回「学校行事を問い返そう」(教科教育課)

県内教員が、元大阪府立大空小学校長の木村泰子さんや熊本大学の苦野一徳さんたちとともに、学校の当たり前を問い直し、教育の本質について対話する企画。今回のテーマは、「学校行事の主語は?」「学校行事では何を大切にするのか?」など。これからの教育活動のヒントがきっと見つかります! 対話動画の閲覧は下記アドレスから。

<https://www.center.ibk.ed.jp/%E6%95%99%E8%82%B2%E6%83%85%E5%A0%B1/%E6%>

[95%99%E8%82%B2%E6%83%85%E5%A0%B1/%E6%95%99%E7%A7%91%E6%95%99%E8%82%B2/%E6%95%99%E8%82%B2%E6%83%85%E5%A0%B1/%E6%95%99%E7%A7%91%E6%95%99%E8%82%B2/Ed%E3%80%80Caf%C3%A9](https://www.nise.go.jp/nc/study/others/disability_list/intellectual/sk-basket)

■3 参考資料等のご紹介

▼すけっとばすけっと(特別支援教育課)

知的障害特別支援学級を担当する先生をサポートするツールを集めた国立特別支援教育総合研究所の web ページです。「知的障害特別支援学級担当者のための授業づくりサポートキット(小学校編)すけっと(Sukett)」に関連するコンテンツをご覧ください。

https://www.nise.go.jp/nc/study/others/disability_list/intellectual/sk-basket

■4 推挽録(教職教育課 主査 増田 年男)

▽「教頭研修講座」、演習の時間に分散会の一つを担当した。演習のテーマは「学校の危機管理」で、事例検討だった。グループに分かれて、4~5人による協議が活発に進んだ。協議の後の雑談の中で、ある教頭先生が私に話しかけてきた。

▽「学校に新採教員がいて、その先生は夕方になると退勤時刻に合わせてきっかり退勤するんです。教頭としてその日のうちに伝えたいことがあっても、「働き方改革」の考え方があるので帰ります、と帰ってしまうことがあるんです。その日に起きた出来事を振り返りながら、助言や指導をすることが十分にできないんです。」「教頭の私からすると“危機”なんです。どうしたらいいでしょう。」その新採教員の日常の詳細は聞き取らなかったが、勤務時間は分かっているが指導・助言の必要を感じた教頭先生の思い、と理解した。

▽その教頭先生は続けた。「今のままでは、ベテランの教員が経験の浅い教員へ引き継ぐ指導の技術や技や考え方を、多く指導することができないんです。教師の仕事はどうなっていくんですか。」

▽教師の仕事は、今でも聖職だと思う。先生方は、児童生徒の成長を願い、日々教師の仕事に取り組んでいる。尊い。「働き方改革」は、時間外の勤務時間の時短が議論される感が強い。時間的に非能率的な性格を持つ教師の仕事とのせめぎ合いになる。うまくいかない面がある。きっちりとはいかない。

▽「働き方改革」は進めなければならない。教職への志願者数にも影響する。しかし、順調に進んでいるのか。教員は満足感をもって改善や変化に馴染んでいるのか。教員からは、「コロナ禍に精選された行事や会議が前に戻った。」という声を聞く。

▽学校や教育行政サイドは苦慮している。「働き方改革」の趣旨の実現はこれから、だと思う。「勤務時間」以外の、例えば今ある教育活動の再構成(スクラップ・アンド・ビルド)を進めよう。人的や物的などの様々な条件整備も必須だ。

▽「働き方改革」の現状を考えると、今はジレンマに突き当たる。しかし、一つ一つ変えていくしかないだろう。「働き方改革」が進まない学校は、まさに“危機”の状況であると思う。